

但馬牛繁殖成績向上対策の歩み

和田山家畜保健衛生所

○松本拓也 三木康平 野村正富

但馬牛繁殖経営において1年1産の繁殖目標を達成することは経営安定化のために重要であり、県の掲げる但馬牛増頭対策を達成する上でも大きな課題である。H18年時点で全国及び県内黒毛和種の平均分娩間隔が約420日であるのに対し、丹波地域の分娩間隔が約442日と長く、その短縮が課題となっていた。そこでH18年度から関係機関と連携して生産者指導を行い、繁殖成績の改善に取り組んできたので、その概要を報告する。

【指導内容ならびに成果】

重点指導農家として丹波市繁殖農家5戸を選定した（飼養頭数A：90頭、B：54頭、C：40頭、D：15頭、E：10頭）。指導開始時点（H18年）の重点指導農家の分娩間隔日数はA：418日、B：512日、C：437日、D：459日、E：490日であった。B～E農家は発情発見率の低値、長期不受胎牛の存在が問題であった。重点指導農家に毎月1回立ち入りし、エコーを用いた早期妊娠診断、栄養管理指導（栄養度判定・血液検査・飼料給与）、長期不受胎牛対策（プログラム授精等の治療・更新）を実施した。その結果、H21年3月時点では分娩間隔日数はA：402日、B：433日、C：396日、D：392日、E：395日と、繁殖成績の改善が認められた。

H21年度からは重点指導農家の見直しを行い、B・C農家を継続対象、繁殖指導の要望があった若手新規就農F農家（飼養頭数84頭）を新たな指導対象として選定し、エコーを用いた早期妊娠診断、栄養管理指導（栄養度判定・飼料給与）、長期不受胎牛対策（プログラム授精等の治療・更新）を毎月1回実施した。その結果、期間中の平均分娩間隔日数±S.D.はそれぞれ、B：401±20日、C：415±8日、F：397±5日で推移した。Bはプログラム授精の導入により一時の分娩間隔が約390日で推移していたが、その後の分娩間隔が増加に転じていることから、発情発見率の向上等の畜主への繁殖管理に対する強い意識付け、長期不受胎牛対策が今後の課題である。一方で、CはH21.3月時点の成績と比較して分娩間隔が短縮しており、Fについても概ね良好な繁殖成績を認めていることから、繁殖成績の安定・維持が必要である。

【まとめ】

H18年より繁殖成績向上対策に取り組んだ結果、丹波地域における繁殖成績の着実な改善が認められたが、依然として1年1産達成には遠い現状である。今後も早期妊娠診断、栄養管理指導の充実を図りつつ、関係団体と連携・情報共有し、管内の繁殖成績の更なる向上に務め、増頭対策に寄与していきたい。